



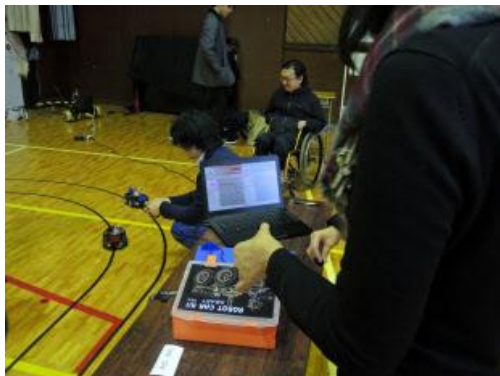
大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4045 号 2017.11.28 発行

最新技術でスポーツ創出 超人スポーツ協会の挑戦 日本経済新聞 2017年11月27日

日々進化する技術を活用し、人間の能力をさらに向上させた新たなスポーツを生み出す取り組みを「超人スポーツ協会」（東京・港）が続けている。発足して約2年。生み出された競技は40以上で、最近では企業や自治体との連携も目立つ。目指すのは「五輪とパラリンピックをつなぐ第3のスポーツ」。障害の有無に関係なく後世まで楽しめるスポーツの創出に挑戦している。



「トコトコ心拍レース」は誰でも簡単に楽しめる

11月11日。東京都渋谷区の地域施設「ケアコミュニティ・原宿の丘」の一室で3種類の見慣れないスポーツの体験会が行われた。小型の立ち乗り電動二輪車「セグウェイ」に座席が着いた“乗り物”が動き回ったり、ローラーが無数についたスーツを装着した人が床を自在に滑ったり。そのうちの 하나가「トコトコ心拍レース」。指に装着した小さなセンサーが心拍数を測定。数値の大小で付属の小型ロボットカーが動き、速さを競い合うという仕組みだ。

### ■障害の有無関係なく平等に

足踏みし、手を振り回すなど心拍数の調節方法は自由なので、誰でも簡単に楽しめる。開発に携わった会社員の西部達矢さん（32）は「身体の差異に関係なく平等に遊べるのがポイント。よりスポーツらしくなるよう、改良を重ねていきたい」と説明する。

体験会は渋谷区などが共催のイベント「超福祉展」の一環で行われた。最新機器を利用した、従来の発想を超えた新しい福祉スポーツの創出が狙いだ。

10月に2回にわたって行われた会議では同協会メンバーや超福祉展の関係者をはじめ、様々な研究者、学生らが集まった。300近いアイデアから熟考を重ね、最終的に残ったのが冒頭の3つ。同協会共同代表で東大大学院教授の稲見昌彦氏は「障害者もそうでない人も一緒に楽しめるスポーツができあがった」と話す。

同協会は2015年に発足。20年東京五輪・パラリンピックの開催決定を受け、「日本が持つ優れた技術を使った新しいスポーツができれば、新たな文化として海外にもPRできるかもしれない」との稲見氏の発想がきっかけ。メンバーには元陸上選手の為末大氏や作家の沖方丁氏を始め、研究者、エンジニア、デザイナーら各界の著名人が名をつらね、意見交換が行われている。

同協会では競技を生み出す上で技術の活用に加え、全ての人が競技者として、また観客としても楽しめるという点を重視している。「歴史を振り返ってもたくさんの種類が創られ、楽しいものが残ってきた」と稲見氏。特に運動に日ごろ縁のない人たちに目を向ける。「彼らでも面白いと思うものができれば、スポーツに対する考え方も変わるはず」

「バブルジャンパー」「スライドリフト」……。 “公式スポーツ”として認定されたのは

これまで13種類。ドローン（小型無人機）や仮想現実（VR）といった最新鋭のテクノロジーを使った競技が並ぶ。なかにはVR技術を使って架空のボールを放ったり、壁を作って防壁したりしながら3対3で競い合う「HADO」（東京・港のmeleapが開発）のように、すでに国内外で普及が進んでいるものもある。

#### 超福祉展で新たに開発された超人スポーツ「goonball」

こうした動きには官民も連携を深める。プロ野球の横浜DeNAベイスターズは今年から同協会との共同企画で「超☆野球」と呼ばれる新商品開発プロジェクトを開始。会社員や学生ら約40人が5チームに分かれ、「野球を超えた新しいスポーツ」の創作を競い合った。

10月には誰でも剛速球が投げられるという、ラクロスの道具を応用して創られた「超☆ピッチング」など2作品を発表。試合前に体験会を実施し、一般客からも好評を集めた。企画する同球団「CREATIVE SPORTS LAB」事務局の担当者は「今後もテクノロジーを使ったスポーツ産業を広げ、地域全体を盛り上げたい」と期待する。



#### ■「五輪とパラつなぐ存在に」

スポーツ庁の17年度予算には新スポーツの開発が新たに盛り込まれ、超福祉展を含めた同協会の活動を支援している。同庁健康スポーツ課によると、16年度に年1回も運動をしないという人は国民の約33%を占め、横ばいが続いているという。同課担当者は「スポーツの枠組みをもっと増やし、五輪後も国全体に運動する習慣が根付くようになれば」。来年度は新スポーツの普及強化も視野に入れる。

同様の試みとしてはロボット工学など最新技術を応用した義手・義肢で競技を行う「サイバロン」があるが、同協会が目指すのはあくまで「健常者と障害者が同じように楽しめるスポーツ」と稲見氏。今後は開発はもちろん、体験イベントやコンテストの数を増やし、周知に力を入れていく。その視線の先には20年夏がある。「今までは、どうしても五輪とパラリンピックの間に温度差が生まれてしまっていたと思う。我々がその間をつなぐ存在になれば。技術の力で体格差を埋めることで、人間の能力をさらに発揮できる、そんなスポーツを“日本発”で世界に提案していきたい」（堀部遥）

## 西戸山中・池田さん最優秀 人権作文コン都大会 豊島で表彰式



東京新聞 2017年11月27日

表彰式で賞状を受け取る池田麻里子さん（右）＝豊島区で

平成二十九年度全国中学生人権作文コンテスト都大会（東京法務局・都人権擁護委員連合会主催、東京新聞共催）の表彰式が二十六日、豊島区南池袋のとしまセンタースクエアで開かれ、上位入賞者三十六人に賞状などが贈られた。

都内三百十一校から四万二千九百一編が応募。最優秀賞は、武蔵村山市立第五中学校二年途田空良（さこたそら）さん（東京法務局長賞）▽新宿区立新宿西戸

山中学校一年池田麻里子さん（都人権擁護委員連合会長賞）▽星美学園中学校（北区）二年剣持夢有（むう）さん（東京新聞賞）の三作品。

途田さんは「心のボルトになって。」と題し、けがで足にボルトを埋め込んだ祖父との交流を描写、外から見えない障害を知らせる「ヘルプマーク」などの啓発活動を促した。池田さんは「地域で守る子供の人権」で、身近で起きた児童虐待を丁寧につづり、社会の向

き合い方を考えた。剣持さんは「探せなかった四つ葉のクローバー」で、戦死した大伯父の遺書を引用、戦争体験を受け継ぐ決意を表した。三作は中央大会でも法務省人権擁護局長賞などに選ばれた。

## 認知症地域で支えて 大牟田の取り組み学ぶ先進地 神埼で福祉のまち考える集い



佐賀新聞 2017年11月27日

認知症の当事者目線のまちづくりの重要性について語る大谷さん＝神埼市の西九州大

福祉のまちづくりについて考える社会福祉研究会が25日、神埼市の西九州大神埼キャンパスであった。学生や地域住民ら110人が参加。全国に先駆けて、地域で認知症の高齢者を支える大牟田市の取り組みから、当事者目線の重要性などを学んだ。

「大牟田市における地域支え合いの仕組みづくり」と題し、社会福祉法人東翔会グループホーム「ふぁみ

りえ」ホーム長の大谷るみ子さんが講演した。

大牟田市では、認知症コーディネーター養成研修を2年間で計406時間かけて行うことや、小中学生向けに、認知症当事者の実際の出来事を描いた絵本を基に学習する教室を行っていることなどを紹介した。数年後に行った追跡調査では、76%の子どもたちが「地域の高齢者へのあいさつ」「認知症のことを家族へ伝える」などの取り組みを行ったという。

大谷さんは、認知症の当事者との関わりの中から得た体験を踏まえ、「『認知症だから仕方がない』という考え方ではなく、なぜ出歩くのかに注目すれば、その人の物語や生活習慣などが見えてくる」と説明した。地域のあり方について「単なる仕組みづくりではなく、当事者の視点を重視したまちづくりが重要」と語った。

## 当事者から専門医になった"私の発達障害" 無意味で厄介なハンディではない

心療内科医・医学博士／福島学院大学大学院教授 星野 仁彦

プレジデント 2017年11月27日

発達障害の専門医である星野仁彦氏は、自身も子供の頃、発達障害の当事者でした。場の空気が読めず、すぐにキレてしまい、嘲笑やいじめの対象になる。「自分はダメな人間だ」と絶望したといいます。しかし、そんな場所から少年を救い出したのも、発達障害がもたらす特性でした。星野医師が発達障害を克服した体験談を語ります――。

※本稿は星野仁彦『会社の中の発達障害 いつも嫌なことを言う上司、いつも迷惑をかける部下』（集英社）の第4章「発達障害に気づいて三十年――ある心療内科医の体験記」を再編集したものです。

※写真はイメージです。本文とは関係ありません。

「この子、ちょっとおかしいんじゃないの？」

子どもの頃、私は3歳を過ぎてもほとんど言葉を話すことがなく、両親はとても心配したようです。4歳を過ぎる頃には堰（せき）を切ったようにしゃべり始めたのですが、吃音（きつおん）が青年期になるまで残り、人前で話すのはとても苦痛でした。幼児期や小学校低学年の記憶はほとんど断片的にし

かありません。これも発達障害者の特徴の一つでしょう。

そんな断片的な記憶の一つに、3歳頃の出来事があります。私はいわゆる癩（かん）の強い子どもで、些細なことでかんしゃくを起こし、火がついたように泣き喚（わめ）くことなど日常茶飯事。





ある日、そんな私を見た祖母が「この子、ちょっとおかしいんじゃないの？」と言ったのです。そのとき、3歳児の私は祖母に向かって「お前、早く帰れ！」と、ふてぶてしく言い放ちました。分別もつかぬ子どもの言うこととはいえ、思ったことをなんでも口に出してしまうという性分は幼児期にはすでにあったようです。その後の人生でも、私は場や相手をわきまえず思ったことを口にする失敗を何度も繰り返すこととなります。

4歳で幼稚園に入園しましたが、登園初日、知らない人間が大勢いる騒がしい場所に連れてこられた私は大パニックに陥り、手がつけられないほど激しく泣き喚きました。

発達障害の人の多くは、環境の変化に弱く、分離不安や対人不安が強いといわれています。私にもその傾向は顕著にあったようです。常軌を逸した騒ぎ方で、結局、私の幼稚園生活はわずか1日で終わりました。

### 一生懸命努力しても「だらしなの子」

小学生時代、算数と国語は何とか人並みにできましたが、ほかの科目は全滅でした。特に実技系の体育は、鉄棒、跳び箱、ボール競技などまさに手も足も出ず、音楽では、音符はまったく読めず、リズム感もなく、縦笛でドレミさえともに吹けません。手先が非常に不器用なため、ヒモ結び、折り紙、ハサミを使った作業、布や紙の切り貼り、版画など、図画工作などはことごとくできませんでした。

小学生の私は、同年代の児童に簡単にできることがことごとくできず、始終ぼんやりと空想にふけり、話せば吃音があり、服装はいつもだらしなく、ポケットの中はがらくたでいっぱい、口を開けばとんちんかんなことばかり言うので、学校では常に嘲笑的であり、いじめっ子たちからは毎日のようにいじめられたり、からかわれたりしていました。そんなときどう返したらいいのかわからず、うつむいてただ黙ってやり過ごし、家に帰って悔し涙を流したこともあります。ぼんやりした性格とはいえ、やはり心は傷つき、悲しく悔しい思いをしました。

『会社の中の発達障害 いつも嫌なことを言う上司、いつも迷惑をかける部下』（星野 仁彦著・集英社刊）

小学校の高学年になるといじめられた後にこみあげてくるものは、悲しみや悔しさより、「自分はダメな人間だ」という絶望や空しさでした。落ち込むことも多くなり、「生きていたくないな」と思うこともありました。一生懸命努力してもだらしななのです。しかし、当時、ひとりだけでしたが、私をかばってくれる親友がいてくれたおかげで、学校に通うことができました。たったひとりでも、自分を理解してくれる友人がいることは、私にとっては大きな希望でした。その後も交友関係は狭く、決して友人の数は多くはありませんでしたが、中学、高校、大学時代にできた数人の

親友にどれだけ世話になり助けられたことでしょう。彼らには当時も今も感謝の気持ちでいっぱいです。

### 興味のある分野を見つけた中学生時代

不器用さは一向に変わりませんでしたが、中学では得意科目と呼べる教科ができました。英語と社会です。自分が興味を持った科目の勉強をしたり、大好きな本やマンガを読むときなどは、わくわくと心が躍り、何かのスイッチがカチリと入り、頭の中が研ぎ澄まされるのが感じられました。

英語とは別にこの時期に私がこだわりを持ってのめりこんだことに、高校野球の勝利予測があります。全国の都道府県で行われる予選大会の試合を観戦し、データを分析し、優勝高校を予測するという作業は、この上なく楽しい時間でした。

得意科目ができ、打ち込める趣味もみつかった私は中学、高校と学校へ通うことがかなり楽になっていました。吃音もあまり出ないようになったことで口数も次第に増えました。

医師だった父の影響を受け、小学生のころより医者になることを目標にしていた私は、大学医学部を目指し受験しました。3校受けましたが結果はすべて不合格。しかし迷うことな



く浪人することを決め「石にかじりついてでも絶対に医者になってやる！」と強く心に誓いました。カチリと例のスイッチが入った瞬間でした。

発達障害特有のこだわりや集中力が発揮されたのでしょうか、浪人中の1年間はそれこそ寝食を忘れるほど徹底的に勉強に打ち込みました。そのかいあってか、翌年、福島県立医科大学医学部に合格。家からは通えない距離なので、大学の近くに安アパートを借り、人生初のひとり暮らしを始めることになりました。

発達障害を抱える私にとって日常生活全般における「管理」は難題でした。使った鍋や食器は洗わずにそのまま放置し、食べたらずばなし、服も本もすべてが出しっぱなしです。先の見通しやビジョンを描くことが苦手な私は、お金の使い方もまるで計画性がなく、1カ月分の仕送りを2週間で使い切ってしまう、いつも親に無心していました。どうしたってライフスキルが低くなりがちな発達障害者には「ひとり暮らしは向かない」というのが、自身の経験から痛感したことです。

### 精神科への関心と、愛妻との出会い

大学での生活もまた困難続きでした。板書をしない教授の授業がとりわけ苦手でした。耳からの情報だけでは頭の中が混沌となり、物事を理解、整理できないのです。またレポート課題はいつも先延ばしにし、提出期限を守れません。

在学中、医学生はすべての診療科を回りますが、私は精神科に興味がありました。特にこのころからすでに発達障害に強い関心を寄せていました。当時は自分が発達障害だという認識などありませんでしたが、やはり潜在的に魅かれるものがあったのかもしれない。

医学部の5年生になると、県内の精神科の専門病院を訪れ、患者さんとの面接をさせていただくようになりました。その病院の受付にいたのが、現在の妻です。週に1回、日曜日に病院を訪れる私と彼女は顔なじみになり、自然と親しくなっていきました。5年生から2年近く付き合い、大学卒業後の医師国家試験の後に結婚する約束をしました。妻と出会えたことは私にとってこの上ない幸運であり、神様からの恩恵だったと思っています。

しかし、彼女との結婚を果たすためにはクリアしなければならない問題がありました。まずは医学部の卒業です。このときに手厚くサポートしてくれたのが彼女でした。ノートさえろくすっぽ取っていない私にとって、頼みの綱は優秀な同級生のノートをコピーさせてもらい勉強することしかなかったのですが、彼女が病院のコピー機を使って膨大な数のノートをコピーしてくれたのです。おかげで卒業直前の2月によろやくすべての科目に合格することができました。

しかし、喜びもつかの間、すぐさま国家試験という最大の難関が待っていました。彼女との結婚がかかったこの試験だけはなんとしてでも受からなければなりません。両親には卒業試験に合格した際に、「結婚したい人がいる」と打ちあけていましたが、案の定、「認めない」「とんでもない」と反対されました。両親はかねがね、病院つきのお嬢様のところへ私を婿入りさせる気でいたからです。しかし、私にはみじんもその気はありませんでした。

「もう決めたんだ。国家試験に受かったら結婚する。反対なら反対でもいい。結婚式には父さんたちを呼ばないまでです」と宣言しました。頑固は父親譲りでもある気性です。

そんないきさつもあり、医師国家試験は私と妻にとってはどうしても受からなければいけない人生最大の試験になりました。

そこで、過去10年間に出版された、いわゆる「過去問」を徹底的にリサーチし、ヤマを張ることにしたのです。そのとき大いに役立ったのが、10代の頃に夢中になった高校野球の予測分析と、妻の支えでした。ヤマは見事に当たり、医師国家試験に合格することができました。ここでもまた私は、興味を感じる対象には過剰ともいえる集中力が向けられ、もくもくと努力することができる「発達障害」の特性に助けられたのです。

### 自分の障害を「俯瞰」できるようになった

私は自身も発達障害の当事者であるためか（気がついたのは研究してしばらくたってからのことですが）何かに導かれるように発達障害の研究をライフワークとし、40年以上も夢中になって、臨床、研究に打ち込んできました。その一方でこの分野の医師や研究者を目

指す学生への教育指導活動や、発達障害への理解をうながす啓発にも情熱を注いできました。発達障害を抱える私がなぜ今日まで医者としてやってこられたのか、不思議に思われるかもしれません。それはひとえに妻をはじめとする、多くの先輩や友人、同僚たちの理解とサポートのおかげであり、寛容と愛情あってこそだと身にしみて感じています。

私という人間は自由奔放で、超がつくほどのマイペース、そして何より指図されたり束縛されることが嫌いです。「同調」を強いられる窮屈な組織の中では伸び伸びと生きてはいけなかったでしょう。しかし、医師という、比較的自由で変化と刺激に富み、探究と検証が求められる職業を選んだことは幸運でした。そしてなにより、自らも発達障害であるおかげで、患者さんの悩みを理解し共感することができます。精神科医は天職であったと思えるのです。

とはいえ、もともと私は人の話をじっくりと聞くのは苦手な性分です。しかし、長年、さまざまな患者さんと接するうちに、私は自らの「発達障害」を俯瞰（ふかん）できるようになりました。反面教師というのは失礼な物言いかもしれませんが、患者さんから学ぶことはとても多く、診察とともに自分の感情を冷静にコントロールできるようになっていったのです。

### 障害への理解が2次障害を防ぐ

私の診療は「とことん話を聞いて、これでもかとしつこく尋ねる」問診が主です。まずは患者さんが抱えた思いを存分に語ってもらい、次に患者さん本人だけではなく、家族やパートナーにも質問をします。どんな子ども時代だったのか、両親の言動は？ 兄弟や姉妹との関係は？ など、詳しく聞きます。小児期における生活ぶりをあきらかにするためにも、家族からの聴取は重要です。「星野流根掘り葉掘り」と言われる入念な問診で、必ず治療の糸口が見えてくるのです。

またご家族やパートナーの方には、一方的に本人を叱ることや感情的に泣いたり落ちこんだりすることは発達障害の改善につながらないことをお知らせし、2次障害を防ぎ、家族がともに考えていく基盤を作るようにしています。

私の育った家庭はいわゆる「機能不全家族」（家族としての機能が果たせず、子どもが健全に育つ条件が欠けている家族のこと）でした。発達障害に機能不全家族が加わると症状の悪化や2次障害を起こしやすくなります。虐待や暴力、ネグレクトなど、自分が子どものころにされたことを自分の子どもにしてしまう世代間伝播という問題も顕著です。しかし、「自分は機能不全家族に育った」という自覚がしっかりあれば、世代間伝播は食い止められます。傷ついた過去をうやむやにしたり、なかったことにするのではなく、しっかりと受け止めて「知ること、感ずること、悟ること」が大事なのです。

### 発達障害者の“純粋なエネルギー”を活かす

70年近い発達障害者としての自身の経験からも精神科医としての臨床経験からも確信を持って言えることは、発達障害は決して無意味で厄介なハンディなどではなく、上手にコントロールし仕事や生活の中で活かせば、人生を深く豊かにする才能であり能力であるということです。

- 興味を持ったことに集中し、決してあきらめないこと
- 独自のこだわりは強力なエネルギーを生むこと
- 人が思いつかないようなことがひらめくこと
- ひらめいたことは猪突猛進で実行すること

など、この純粋なエネルギーは、興味や関心の的と仕事や学業とが一致すれば、きっとその分野ですばらしい業績を残せるはずです。

そのためには、目の前の現実を虚心坦懐に観察すること。

自身も家族もありのままの姿を受け入れ、広い視野で将来を見るようにすれば、苦手なことに悩むことだけに陥らず、得意なことを見つけてそれを活かし生活することができるのです。「気づくこと、受け入れること、そして情熱を注いで生きること」。

本人やご家族、職場を含む周囲の人間が、現実気づき自分を冷静に見つめなおすことが

できれば、治療の効果も上がり、改善の方向に向かう可能性は十分にあります。さらに必要に応じて、薬の使用を検討することも必要です。適切に薬物療法を施していくと、発達障害は調整できます。そしてぜひ、心から楽しめる「好きなこと」や「わくわくする時間」をみつけていただきたいものです。それが愚にもつかないことに見えても、発達障害を抱えて生きる方や家族の助けとなるでしょう。

#### 星野 仁彦 (ほしの・よしひこ)

心療内科医・医学博士。福島学院大学大学院教授。1947年福島県生まれ。福島県立大学卒業後、米国エール大学児童精神科留学。福島県立医科大学神経精神科助教授などを経て現職。専門は児童精神医学、スクールカウンセリング、精神薬理学など。発達障害を専門とする児童精神医学の第一人者。著書に『発達障害に気づかない大人たち』『発達障害に気づかない大人たち<職場編>』（祥伝社新書）、『発達障害を見過ごされる子ども、認めない親』（幻冬舎新書）などがある。

#### 障害者の社会参加支え50年 220人出席し式典 官教大付属特別支援学校



河北新報 2017年11月27日  
創立50周年を祝い、すずめ踊りを披露する生徒たち  
宮城教育大付属特別支援学校(仙台市青葉区)の創立50周年記念式典が25日、官教大講堂であり、在校生や卒業生、元教職員ら約220人が出席した。

水谷好成校長が「障害者が積極的に参加する社会を実現するため、特別支援学校の役割はますます重要になった。歴史を引き継ぎ、未来に向かって本校の教育活動に貢献したい」と式辞を述べた。

中学部と高等部の生徒がすずめ踊りとエイサーを披露し、50周年を祝った。高等部2年の男子は「伝統に恥じぬよう日々の学習に励みたい」と語った。

特別支援学校は1967年、官教大教育学部付属小・中の特殊学級を改組して設立。71年に青葉山に移転した。昨年度までに小学部を180人、中学部を353人、高等部を461人が卒業した。

#### 追手門学院大手前中 国際ロボコンで銅メダル獲得 大阪日日新聞 n 2017年11月27日 表彰式で3位入賞を喜ぶ辰巳さん(中央)ら=11月12日、コスタリカ・サンホセ

大阪の中学生が世界をうならせた。追手門学院大手前中学校(大阪府中央区)のロボットサイエンス部が、国際ロボットコンテスト「WRO2017」(11月10~12日・コスタリカ)のオープンカテゴリー中学生部門で3位入賞を果たした。人の発する言葉を手の形に変換する「手話通訳ロボット」で、高評価を獲得。顧問の福田哲也教頭は「子供たちの努力の結果の銅メダル。本当によくやった」とたたえた。



#### ■英語プレゼン

手話通訳ロボットは、1~3年の5人チームで開発。今年9月の日本決勝大会で最優秀を受賞し、世界大会への出場権を獲得した。

コスタリカには、リーダーでプログラミングを手掛けた3年の辰巳瑛さん(14)、ロボット本体を担当した2年の桜井鴻乃介さん(14)、プレゼン対策を中心に担当した倉富星



衣さん（14）の3人が参戦。5分のプレゼンと10分の質疑応答に挑んだ。

プレゼンの練習は機内や飛行場などでも「本番の大声量」で入念に繰り返し、質疑応答の対策として質問を想定した説明用のパネルなどを事前に用意した。慣れない英語での15分間ではあったが、倉富さんは「仲間と助け合いながら、固まらずに話せた」と胸を張る。

国際大会で高い評価を集めた追手門学院大手前中の手話通訳ロボット

#### ■役に立ちたい

手話通訳ロボットの開発は、聴覚障害の親を持つ辰巳さんの「耳の聞こえない人たちを助けるようなロボットを作りたい」という思いから始まった。

同大会では審査会だけでなく、会場内のブースでも「世界の人たちに知ってほしい」と声がかかるまでアピール。いつの間にか人だかりができ、海外のろうあ者の輝く表情を目の当たりにした。

辰巳さんは「ロボットづくりはぼんやりとした夢だったが、この大会で何がしたいかはっきりした。ろうあ者の役に立つことを追求していく」と言い切る。

#### ■新しい目標へ

表彰式の結果発表では当初、3位以内に同中学校の名前はなかった。「手応えはあったのに」と肩を落としたのもつかの間、訂正の報告が入り、銅メダルは「OTEMON-」のコール。これ以上ないサプライズに、「言葉にできない喜び」と口をそろえた。

本年度中は手話通訳ロボットの広報活動を予定しているが、桜井さんは「次は車のロボットで、世界を驚かせたい」と次回作の構想に余念がない。倉富さんも「いろんな国の人とスムーズにコミュニケーションが取れるように、もっと英語を勉強する」と新しい目標に目を向けていた。



### 防災テーマにクイズ、手話 市民ら集う 北ボラまつり

大阪日日新聞 2017年11月27日

災害ボランティアの受け入れ訓練を行うボランティアたち=26日、大阪市北区の在宅サービスセンター

大阪市北区を中心に活動するボランティアや市民団体が集まるイベント「北ボラまつり」（大阪市北区社会福祉協議会など主催）が26日、同区神山町の北区在宅サービスセンターで行われた。防災クイズや手話体験など、楽しみながら防災を学び、交流を深めた。

「防災」をテーマに開催され、今年で4回目。災害時に特に困難にさらされる障害者や高齢者、乳幼児への対応や災害への備えを体験を通して学んだ。また、災害発生時のボランティア受け入れの訓練も行われた。

パフォーマンスステージでは、オカリナ演奏や傘踊りのほか、毎年12月にECC国際外語専門学校（北区中崎西）で東日本大震災被災地の福島県支援を目的としたカフェを5日間限定営業している同校ホテルコースの学生が登壇。現在の同県浪江町の復興の様子などを報告した。

同社協の八木多起子さんは「いろんな社会問題に目を向け、自分の得意を生かしてボランティアできるような環境を作っていきたい」と話していた。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

